

実行委員長 青山 隆夫（東京理科大学薬学部）

平成 27 年 9 月 19 日（土）、第 57 回医療薬学公開シンポジウムを東京理科大学神楽坂キャンパスで開催した（臨床系教員連絡会後援）。テーマは「医療薬学研究の発展に向けて - 薬学生への種蒔きから薬剤師での結実へ -」で、基調講演 2 名、シンポジウムでは薬学生 4 名、大学教員 1 名、病院・薬局から 2 名の先生に講演をいただいた。医療薬学研究に関するテーマで、講演者に大学教員と薬学生に入っていたいただいたこともあり、参加者 131 名のうち 55 名は大学関係者であった。

臨床で薬剤師が患者の問題を見つけ出して薬物療法を設計する行程はまさに研究作業と同様であり、問題解決能力が必要となる。また、医療薬学研究によって、薬物療法や薬剤師業務のエビデンスが確立されれば、医療の質が高まるとともに薬剤師の地位の向上にもつながる。この能力を伸ばすために大学においては講義や実習の合間に学生が行う研究活動が大きな意味を持つ。6 年制薬学教育では、問題解決能力を養うことを目標として、「総合薬学研究」という科目が設けられている。さらに平成 27 年度からの「改訂薬学教育モデル・コアカリキュラム」には「薬学研究」が項目立てされており、「薬剤師として求められる基本的な資質」の一つとして「研究能力」が挙げられている。薬学における研究分野は広汎であるが、医療現場から大学に移籍した（あるいは兼任）臨床系教員を中心に、現場と密着した医療薬学研究に取り組まれている大学も多い。

基調講演として、東京理科大学倫理委員会委員長の小茂田昌代先生は、昨年度に改訂された医学系研究に関する倫理指針に関連して、研究を進めるにあたり倫理的配慮を今まで以上に実践する必要性を強調されていた。大阪大学大学院医学系研究科臨床統計疫学の山本紘司先生には、臨床研究において必須である医療統計の考え方についての講演をいただいた。シンポジウムでは、まず、6 年生の奥山愛さん（城西大学）は、健常人での臨床試験で野菜ジュース 200mL を食前 30 分に摂取して食後過血糖を抑制できることを発表した。本多里佳子さん（慶應義塾大学）の講演は、新規抗生物質ダプトマイシンの体内動態から至適投与方法を検討するために HPLC を用いた血中濃度測定方法を開発した研究であった。山下浩平くん（東京理科大学）は、腎移植後サイトメガロウイルス感染症の予防に対する抗ウイルス薬の投与方法の有効性についてメタアナリシスによる手法で解析していた。また、東京薬科大学博士課程の藤戸理香さんの講演は、受容体占有理論を用いて β 遮断薬の適正使用法の構築した研究であった。各発表に多くの質問があり活発な討論が展開された。参加者の感想として、6 年制の学部生と大学院生の研究内容のレベルの高さと、質問への対応の的確さに感心する声が多かった。大学教員の講演では、東京理科大学助教の下村齊先生の「結核専門病院との連携による結核と肺 MAC 症治療薬の適正使用に関する臨床研究」では、研究内容もさることながら、臨床研究の意義、医療現場とのやりとりや、大学と医療機関の倫理委員会への申請などの膨大な作業についての説明があった。医療現場からは、関越病院・薬剤科長の安野伸浩先生の「臨床現場における医療薬学研究の探索と課題」、千葉県薬剤師会・薬事情報センター長の飯嶋久志先生の「薬局における医療薬学研究～大学といかに共同し、Evidence を創出するか～」では、医療現場での臨床研究の実際と、大学と連携して行っている研究を中心に報告をいただいた。

本シンポジウムが、今後の日本の医療を牽引する薬学生においては医療薬学研究の素晴らしさや重要性を認識し、大学教員と医療現場の薬剤師には医療薬学研究の活性化に向けた方策について考える契機なることを期待したいと思う。最後に企画・運営に御支援・御尽力いただいた金本郁男先生（城西大学）、木津純子先生（慶應義塾大学）、東京理科大学のスタッフ、さらには、日本医療薬学会事務局の皆さまに心から御礼申し上げます。